

## キュルテペ遺跡の赤黒土器 —紀元前 4-3 千年紀の地域間交流—

山口 雄治\*

Red-Black Pottery in Kültepe, Central Anatolia:  
Inter-Regional Relations from 4th to 3rd Millennium BC.

Yuji YAMAGUCHI

キュルテペ遺跡北トレンチの成果は、中央アナトリア南部において不明確であった前期青銅器時代の物質文化とその年代について、新たな資料を提供するものである。これにより、キュルテペ遺跡は少なくとも前期青銅器時代初頭にまで遡り、また、本地域におけるこれまでの編年の基準となっているアリシャル・ホユック遺跡各層の時間的位置付けについて、ある程度の目処を付けることが可能になった。

次に、出土した赤黒土器に注目し、中央・北東・南東アナトリアにおけるその出現年代、土器内外面の色調パターンの特徴、その類似性を検討した。現状では、赤黒土器は中央アナトリアで最も古く前 3600 年頃には出現し、北東・南東アナトリア地域の土器へ影響を与えたと考えられるが、特に南東アナトリアとの類似性が強かった。しかし前 3 千年紀前葉になると、その類似性は弱まり、地域間の関係が変化したことがわかった。

キーワード：中央アナトリア、キュルテペ遺跡、後期銅石器～前期青銅器時代、赤黒土器、地域間交流

The results from the north trench of the Kültepe site provide new data on the material culture and chronology of the Early Bronze Age, redefining previous understanding of southern Central Anatolia. It is now possible to date the occupation of Kültepe to at least the beginning of the Early Bronze Age and to determine the chronological position of Alişar Höyük, a prior basis for the chronology of the region.

Next, this research focused on Red-Black Pottery and examined its age, characteristics (inner and outer color pattern), and similarities in Central, Northeast and Southeast Anatolia. Red-Black Pottery appeared in Central Anatolia as early as 3600 BC, and is thought to influence pottery of Northeast and Southeast Anatolia, with a strong similarity to the latter region. However, after the 3rd Millennium BC, the ceramic similarities between Central and Southeast Anatolia weakened and the relationship between the regions changed.

Keywords: Central Anatolia, Kültepe, Late Chalcolithic-Early Bronze Age, Red-Black Pottery, Inter-Regional Relations

### 1. はじめに

中央アナトリアでは、後期銅石器～前期青銅器時代の連続的な堆積を示す遺跡が少なく（図 1）、発掘調査された遺跡は少数あるものの、調査年代が古く今日的評価に耐えうる資料がほとんどない状況が続いていた。特に、クズルウルマック（Kızılırmak）川以南ではこうした状況が顕著であり、当該地域・時期の文化的様相は不明瞭とされてきた（Düring 2011; Steadman 2011 など）。

キュルテペ（Kültepe）遺跡では、2015 年以降、中央アナトリアにおける銅石器～前期青銅器時代の物質文化を明らかにする目的で新たな調査地点（北トレ

ンチ）を設定して発掘調査が行われている。そこでは前期青銅器時代の土器はもとより建物址や墓址と考えられる遺構が検出され、次第にその文化的状況が明らかとなってきた（Kulakoğlu et al. 2020）。

本論では、まずキュルテペ遺跡北トレンチにおいて出土した遺構・遺物の年代と特徴を整理する。そして、これまで本地域の編年の基準として用いられてきたアリシャル・ホユック（Alişar Höyük）遺跡出土資料との比較から、当該資料が本地域における編年の整備に資することを展望する。その後、赤黒土器に注目して地域間関係について予察し、今後の研究の課題を提示したい。

\*岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

Archaeological Research Center, Okayama University

西アジア考古学 第 23 号 2022 年 101-110 頁 © 日本西アジア考古学会

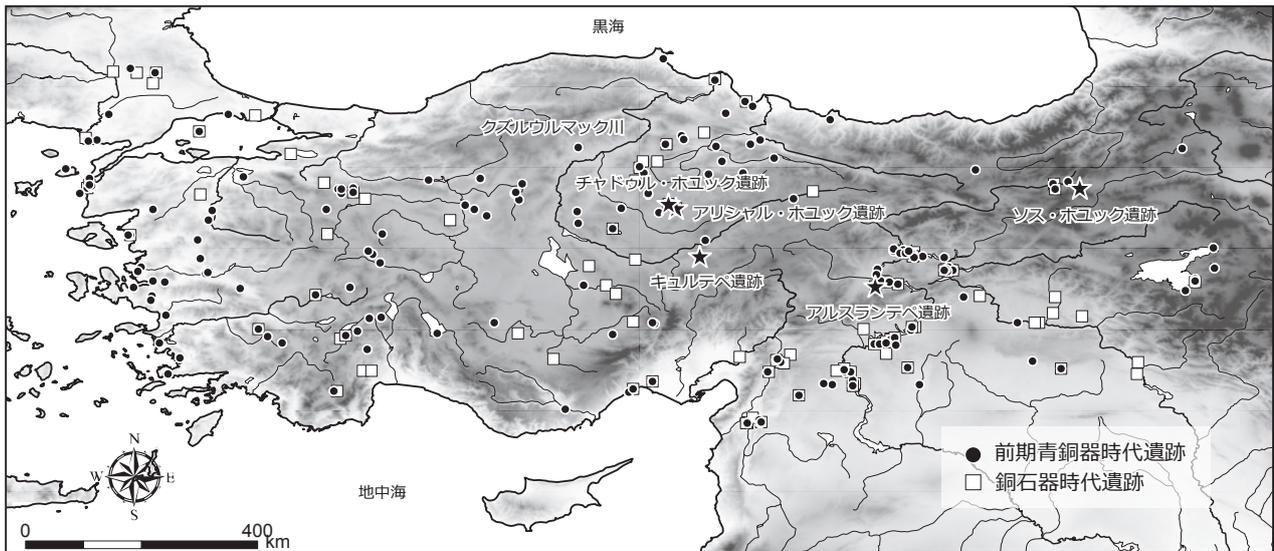


図1 銅石器～前期青銅器時代の主要遺跡

## 2. キュルテペ遺跡北トレンチ

本調査地点は、キュルテペ遺跡北辺に位置し、10 x 10 m の範囲において第XV層まで調査されている (Kulakoğlu et al. 2020)。ここでは、遺構と土器の変化を概説し、それらの年代的位置付けについて確認する<sup>1)</sup>。

なお、本調査地点東半部は攪乱を受けており、第II～V層までの遺構の遺存状況が良いとは言えない。一方西半部では、第III～VI層にかけての遺構が良好に遺存していたため、第VII層以下の調査は東半部のみで行った。また、第X～XV層は調査区北東隅に設けたおよそ2.5 x 1.2 m の深掘試掘溝でのみ確認した。したがって、第II～VI層の遺構はほぼ西半部、第VII層以下の遺構は東半部において検出したこととなり、本調査地点全面で検出された訳ではない。

### (1) 建物址

建物址は、第XV・XIV・XII～VIII・VI～IV層において確認されている (図2)。

第XI層以下では、建物の壁体の一部が検出されている。第XI層の壁体は、基底面に大形の石が並べられ、その上に板状の石が積まれていた。そしてその表面(側面)には最大で厚さ約0.1 m を測る精良な粘土が張られていた。幅はおよそ1.0 m を測る。こうした粘土張りの壁体は第XV・XIV・XII層においても確認されている。

第X層以上になると、壁体に粘土は認められなくなる。最も残りのよい第IV層では、半地下式建物(建物1)が検出されている。南北およそ3.8 m、東西4.5 m 以上の掘形内に構築された石積みの壁体によって構成され、東西に2つの空間をもつ。西側の部屋は東西

2.27 m、南北1.85 m、深さ1.0 m を測る。東側の部屋は東西0.95 m、南北1.55 m、深さ約0.5 m で、壁体は幅狭でつくりも粗雑であることからみて、西側の部屋の付属空間と考えられる。第V層では、東西8.0 m 以上を測る建物2を検出した。2本以上の石積壁により内部が区画されており複室構造をとるが、一部のみの検出のためその全体的な姿は明らかでない。第X～VIII・VI層においても壁体が確認されているが、全体が検出されているわけではないことから、建物の規模については不明である。これらの壁体は、そのほとんどが約0.2～0.5 m 大の石を2～3列に並べて幅0.6～0.9 m 程の石積みを構築するものである。

以上のように、建物址はXI層以下では大形の石や粘土が利用されるのに対し、第X層以上になると石のみが用いられるようになる。壁体の構築技術と利用素材からは第X層に画期を確認することができる。

### (2) 土器

土器は、非ロクロ製とロクロ製の2群に大別できる(紺谷ほか 2016, 2020; 上杉ほか 2016; 下釜ほか 2017; 山口ほか 2020)。前者の土器はすべての層位から出土するのに対して、後者の土器は第IX層から出現し、この中にはいわゆるシリアン・ボトル (Syrian Bottle) も含まれる。ここでは、非ロクロ製土器について若干の検討を行いたい(ロクロ製土器を含む、土器全体については本号の下釜論文を参照)。

非ロクロ製土器の外面色調は、第XV～IX層では赤色系が6割弱、黒色系の土器が2～3割程度の比率で出土する(図3)。XI層以下においては、第3章で詳述する赤黒土器 (Red-Black Pottery, Red-Black Burnished Ware) が出土している。この土器の特徴

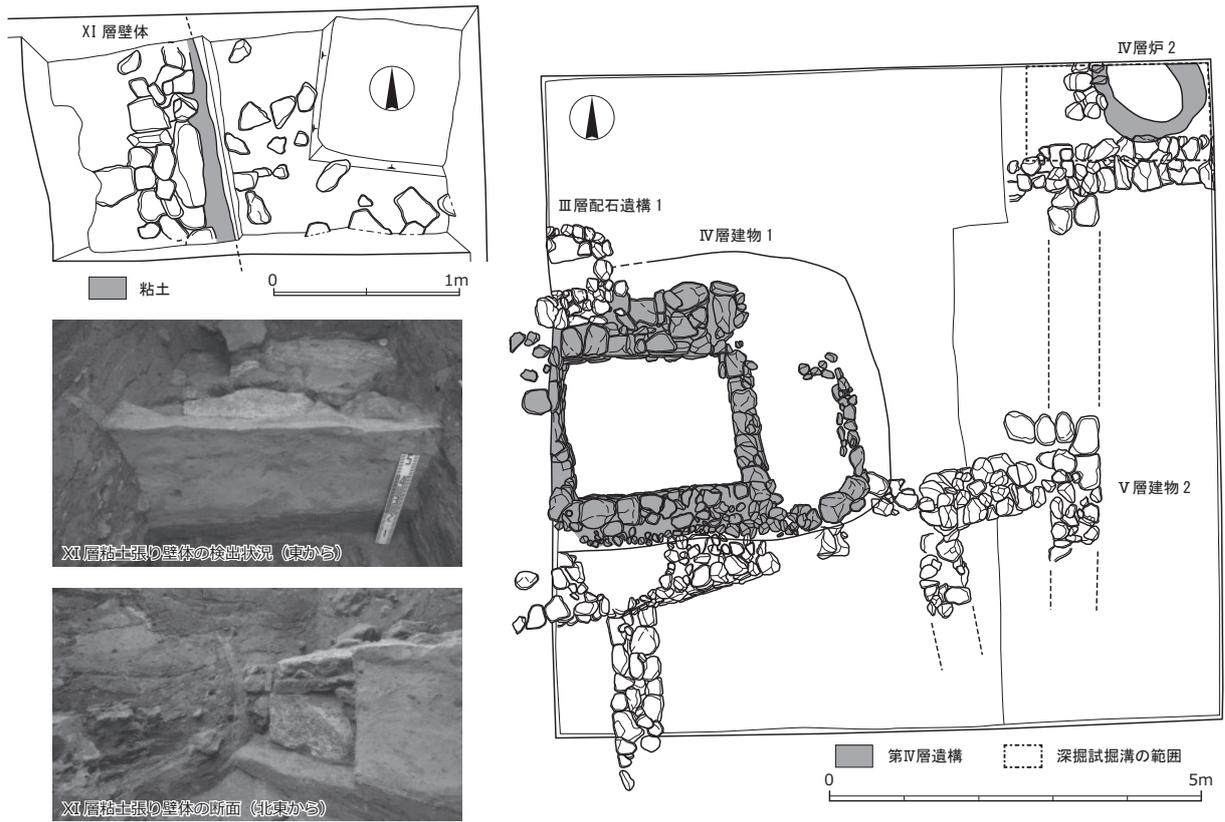


図2 キュルテペ遺跡北トレンチの遺構（左：第XI層検出 右：第III～V層検出）

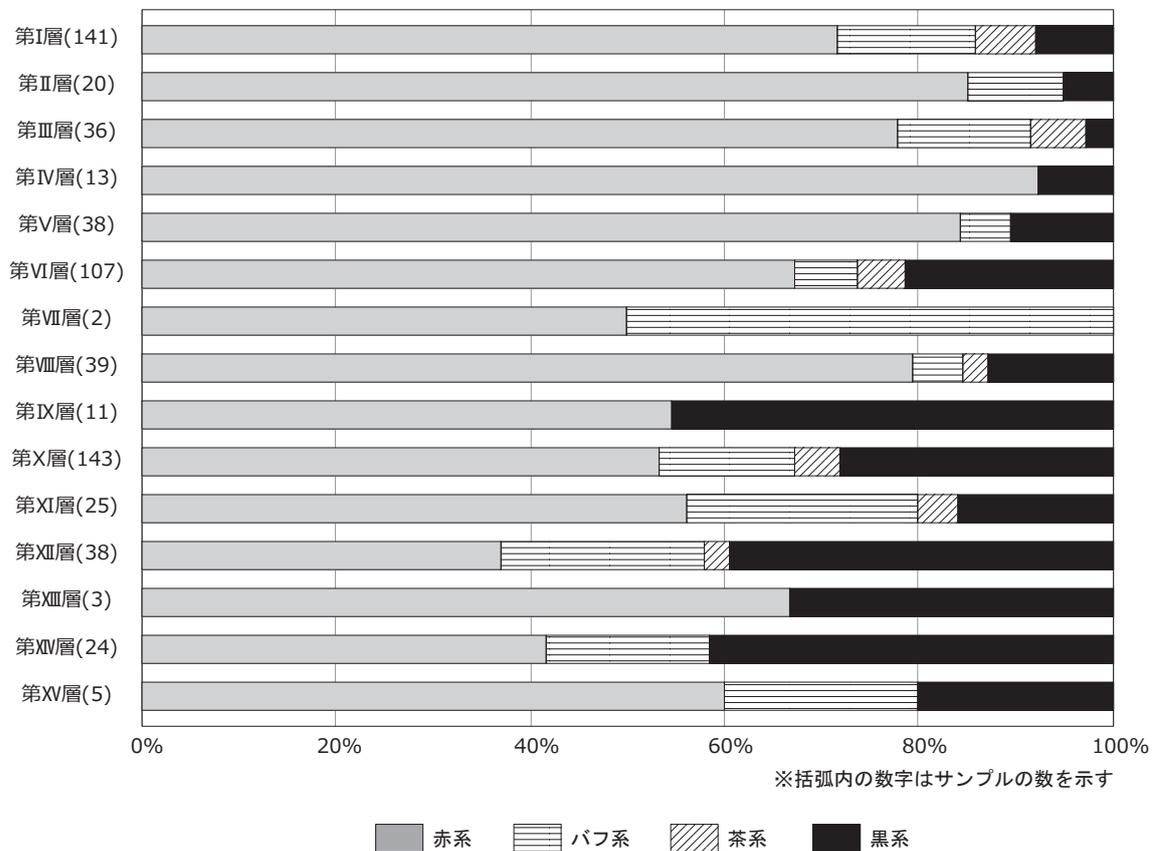


図3 キュルテペ遺跡北トレンチにおける非ロクロ製土器外面色調の変化

は、土器内外面の色調が赤色と黒色の明瞭なコントラストを呈することである。本調査地点においては、外面は赤色～バフ系だが内面は黒色を呈し丁寧なミガキ調整が施される小形の鉢などが出土している（図4）。これらの土器は、鉢などの開放器形において内面が黒色で外面が赤色を呈す変動パターン（Alternate Pattern）をとる（Palumbi 2003, 2008 など）。図3中の外面赤色系やバフ系土器とした土器の中にはこの赤黒土器が含まれるが、その数は少ない。

一方で第Ⅷ層になると赤色系の土器が7～8割程度に増加し黒色系の土器が減少するという傾向がある。また、彩文土器は各層で少量出土しているが、いわゆるアリシャルⅢ土器（Alişar Ⅲ Pottery）は第Ⅱ層から出土し始め、第Ⅰ層において多く出土するようになる。

したがって、第Ⅳ～Ⅹ層では非ロクロ製土器しか存在せず、赤色系と黒色系の土器が出土する。第Ⅸ層からはロクロ製土器が出土するようになり、第Ⅷ層以降、黒色系の土器は減少して赤色系の土器が多くなる。そして、第Ⅱ・Ⅰ層ではアリシャルⅢ土器が出土するようになる、という変化が読み取れる。

### (3) 年代

中央アナトリアにおける前期青銅器時代の年代区分は、前3000～2700/2600年頃が前期青銅器時代Ⅰ期、前2700/2600～2300年頃が前期青銅器時代Ⅱ期、前2300～2000年頃が前期青銅器時代Ⅲ期とされることが多い（Yakar 2002; Düring 2011; Steadman 2011）。しかしながら、特に後期銅石器と前期青銅器時代Ⅰ期、および前期青銅器時代Ⅰ期とⅡ期の年代がいつ頃であるのかは明確ではない。それは、冒頭でも述べたように、後期銅石器～前期青銅器時代の連続的な堆積を示す遺跡がほとんどないことに起因する。こうした問題はあつたものの、この区分は多く用いられており、本論においても便宜的にこの年代観にしたがって、キュルテペ遺跡北トレンチ出土資料の年代値についてみていきたい<sup>2)</sup>。

第Ⅳ～Ⅶ層の資料は包含層、第Ⅹ～Ⅰ層は土坑や墓といった遺構内から出土した炭化物を試料として年代測定した結果を図5に示した。なお、同一層から得られた複数の値の配置は、試料の採取レベルや遺構の切り合い関係が反映されている訳ではなく、一律に年代順に並べたものである。第Ⅳ～Ⅰ層の年代値は、おおそ前4千年紀末～前3千年紀末の年代（2σ）を示していることがわかる。一部に試料の性質や攪乱等によるものと考えられる多少のばらつきはあるものの、下層から上層にかけて連続的な年代値を示すことから、ある程度の目安として利用することができよう。

これらの年代値を先の前期青銅器時代の年代区分に

当てはめて考えるならば、おおそ以下になるだろう。すなわち、第Ⅳ～ⅩまたはⅨ層がおおよそ前3000～前2650年頃で前期青銅器時代Ⅰ期、第ⅩまたはⅨ～Ⅴ層が前2650年～前2300年頃で前期青銅器時代Ⅱ期、第Ⅳ～Ⅰ層が前2300年～前2000年頃で前期青銅器時代Ⅲ期になるものと考えられる。

### (4) 小結

これまで、建物址、土器の変化と各層の年代値について個別に見てきた。ここではこれらをまとめ、その位置付けについてみていきたい。

建築址は、前期青銅器時代Ⅱ期に壁体の構築技術が変化する。土器は、前期青銅器時代Ⅰ期では赤黒土器の出土や土器の色調が黒・赤色系を呈するものがあつたのに対し、Ⅱ期になると赤色系を呈する土器の比率が増し、ロクロ製土器も出土するようになる。これは、Ⅲ期前半まで継続するようだ。そしてⅢ期後半（第Ⅱ・Ⅰ層）ではアリシャルⅢ土器が出土することが明らかとなった。

こうした変遷について、中央アナトリア地域における当該時期の基準資料となっているアリシャル・ホユック遺跡との比較を行ってみたい（山口ほか2020）。この遺跡では、19-12 M層が銅石器時代、11-7 M層が銅器時代（Copper Age）、6-5 M層が前期青銅器時代に属すると報告されている（von der Osten 1937）。しかし、この銅器時代の定義、土器様相とその年代的位置づけが不明確だったために、今日においても、その前後の時期も含めて年代の評価が定まっていない（Bittel 1950; Orthmann 1963; Thissen 1993; Schoop 2005, 2011; Steadman et al. 2007, 2008; Dittmann 2009; Steadman 2011 など）。こうした問題がありつつもこの遺跡との比較を行うのは、キュルテペ遺跡北トレンチの資料によって基準資料に年代を与えることが可能となり、問題の解決に寄与できるのではないかと考えるからである。

アリシャル・ホユック遺跡出土遺物の垂直分布を詳細に検討すると、以下のことが明らかとなる（von der Osten 1937: fig. 32, Plate 6）。すなわち、銅石器時代とされる19-14 M層では黒色系土器が大勢を占め、13-12 M層になると、黒色系土器に加えて赤色系土器が共存するようになる。また両時期ともフルーツスタンド（Fruit Stand）や刻文土器が出土している。銅器時代とされる11-7 M層では、黒色系土器はほぼなくなり、赤色系土器が優勢となる。先ほどの2種の土器も姿を消すようになる。そして、前期青銅器時代とされる6-5 M層では、引き続き赤色系土器が優勢な中、アリシャルⅢ土器といった彩文土器が多く出現するようになる。

器種レベルの詳細な変化をトレースしているわけで

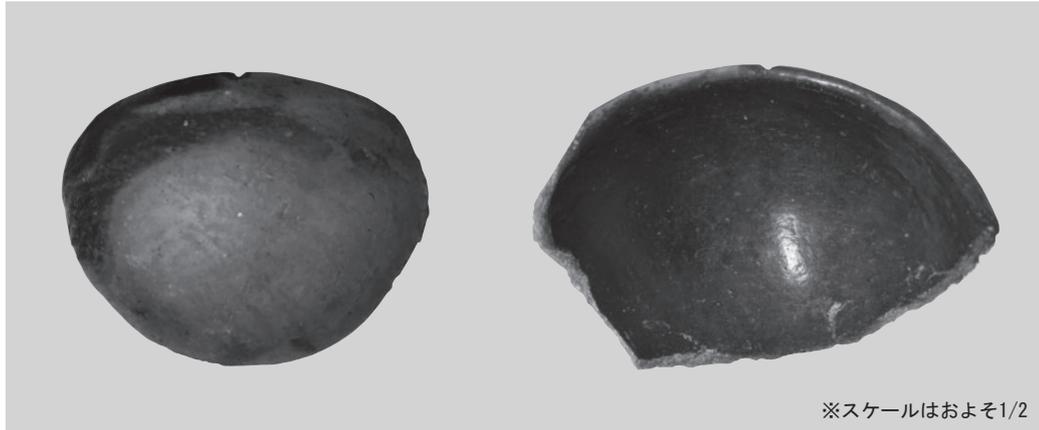


図4 キュルテペ遺跡北トレンチ出土の赤黒土器（左：外面 右：内面）

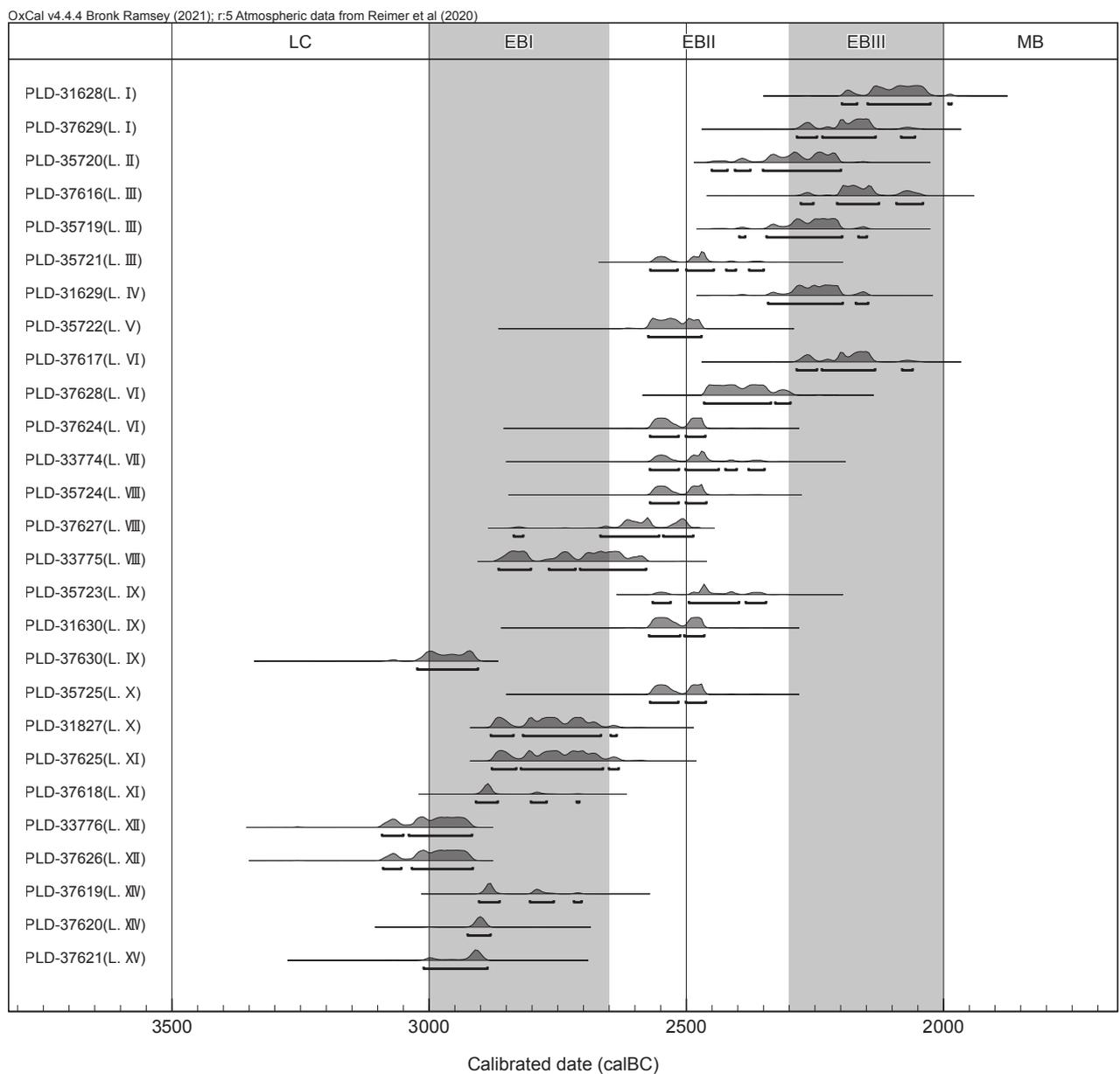


図5 キュルテペ遺跡北トレンチの放射性炭素年代測定値 (2σ)  
(較正プログラム OxCal4.4 を使用)

はないが、こうした変化をキュルテペ遺跡北トレンチ出土土器群の特徴と比較するとおよその並行関係が見えてくる。

まず、銅石器時代とされていた19-14M層の特徴は、キュルテペ遺跡北トレンチでは確認されていない。したがって、この年代は前4千年紀後半に遡ると想定でき、後期銅石器時代と考えることができる。同じく銅石器時代とされていた13-12M層は、フルーツスタンドや刻文土器は確認されていないものの、黒・赤色系土器の出土を考えればキュルテペ遺跡北トレンチ第IV~XまたはIX層、すなわち前期青銅器時代I期以前と評価できる。問題となる銅器時代の11-7M層は、赤色系土器の優勢という状況から、第XないしIX~III層、すなわち前期青銅器時代II期およびIII期前半と考えられるだろう。前期青銅器時代とされる6-5M層では、彩文土器（アリシャルIII土器）が出土するようになることから、第II・I層、すなわち前期青銅器時代III期後半と並行するだろう。

次に、建物址の変化についてもみてみたい。アリシャル・ホユック遺跡の19-12M層ではいくつかの建物壁体が確認されているが、それらは日干レンガのものと、藁や草などを混和しただけの泥を積み上げて表面を滑らかにした壁体の2種が確認されている(von der Osten 1937: 31-32)。これが11-7M層になると、石を用いた壁に変化する。また、アリシャル・ホユック遺跡から北西13kmに位置するチャドゥル・ホユック(Çadır Höyük)遺跡のフェイズIIc1(前期青銅器時代I期)からも、粘土と石が用いられた建物址が検出されている(Steadman et al. 2008; Steadman 2011)。キュルテペ遺跡北トレンチでは石を用いない壁体は見つかっていないが、第X層以降、石と粘土を用いた壁体から石のみの壁体へと変化する点は、上で見た年代観とも合致するものである<sup>3)</sup>。

このように、本調査地点の成果により中央アナトリアにおける既存編年の整理および再検討を具体的にを行うことが可能となった。

これまでのキュルテペ遺跡の調査では、前期青銅器時代I期の様相(特に建築遺構)が不明確で、II期以降の検討が主になされてきた(たとえば Özgüç 1986; Kontani 1995; Kulakoğlu 2015など)。このような状況にあって本調査地点の特徴は、前期青銅器時代I期についての資料を、続くII・III期の資料とともに得られた点にある。そこで次に、第XI層以下から出土した赤黒土器に焦点を当て、当該時期の中央アナトリアの様相および地域間交流についての予察を行いたい。

### 3. 赤黒土器からみた地域間関係

#### (1) 赤黒土器が提起する問題

赤黒土器とは、Red-Black Pottery、Red-Black Burnished Ware などと呼ばれるものであり、1960年にR. J. ブレイドウッド(Braidwood)らによって名付けられた土器群を指す(Braidwood and Braidwood 1960)。これらの土器の特徴として、土器内外面の色調が赤色と黒色の明瞭なコントラストを呈することが挙げられる。また非常に丁寧なミガキ調整が施されており、胎土には鉱物や植物が混和材として含まれる。トルコ南東部アムーク平原の調査では、アムークG期後半に少量ながら出現しH期~I期前半に多く見られるとされ、ED(Early Dynasty)I期後半~EDIII期前半に位置付けられた。一方で、南西ジョージアで調査を行っていたB.クフティン(Kuftin)もまた、土器内外面がそれぞれ赤色と黒色を呈し丁寧にミガキ調整された土器について報告し、これに銅器時代(Eneolithic)前半の年代を与えクラ・アラクス文化(Kura-Araxes Culture)に属する遺物と考えていた(Kuftin 1941)。これらの赤黒土器は、レヴァント地方に広く見られるヒルベト・ケラク土器(Khirbet Kerak Ware)との類似性が古くから指摘されることから、レヴァント、アナトリア、トランスコーカサスという広い地域に分布する土器として認識され、それらの地域間関係を考察する一つの文化要素として注目されるようになった<sup>4)</sup>(Burney and Lang 1971)。

北東アナトリアのソス・ホユック(Sos Höyük)遺跡と南東アナトリアのアルスランテペ(Arslantepe)遺跡出土の赤黒土器の検討をしたG.パルンビ(Palumbi)は、赤黒土器には、常に外面が黒色を呈する固定パターン(Fixed Pattern)と、壺などの閉塞器形では外面が黒色を呈するものの、鉢などの開放器形では内面が黒色で外面が赤色を呈する変動パターン(Alternate Pattern)の二者が存在することを指摘した(Palumbi 2003, 2008など)<sup>5)</sup>。そして、固定パターンはソス・ホユック遺跡、変動パターンはアルスランテペ遺跡で認められ、他の物質文化の検討も踏まえてソス・ホユック遺跡にクラ・アラクス文化の影響が強く表れていることを指摘している。つまり、同じ赤黒土器(と呼ばれるもの)であっても地域によって器形や赤黒のパターンに斉一性は認められないことから、異なる土器群として認識する必要があることを説いた。

近年では、中央アナトリアにもこの赤黒土器が認知されることで、より広大な分布をもつに至っている。これまでトランスコーカサスに求められていたその起源が中央アナトリアである可能性や、中央アナトリアと南東アナトリアとの形態や赤黒のパターンの類似性

が指摘され始めている (Schoop 2011; Akgül 2012; Frangipane 2014; 須藤 2015; Sudo et al. 2017)。

このように、赤黒土器は後期銅石器～前期青銅器時代における中央アナトリアの地域間交流を考察する上で重要な遺物と考えられる。これまでの検討は、赤黒土器の出現に注目した研究が多く、地域間関係とその時間的変化を追うものは多くない。それは中央アナトリアにおける前期青銅器時代I期の資料が不明瞭という資料的な状況に起因するのではあるが、前述したようにキュルテペ遺跡北トレンチでは、その時期の状況がつかめることとなった。以下では、各地域の代表的な遺跡の赤黒土器について概観し、赤黒土器からみた地域間関係の変遷についてみてみたい。

## (2) 中央・北東・南東アナトリアの赤黒土器

中央アナトリアにおける赤黒土器の出現については、現時点で最も古い事例としてチャドゥル・ホユック遺跡を挙げることができる (Steadman et al. 2007, 2008)。

この遺跡における後期銅石器時代のフェイズ Ib (前 4000～前 3600 年頃)<sup>6)</sup>の土器は多種の鉢で構成され、その色調は内外面黒色を呈するものが多いものの、外面が黒色、内面がバフ～オレンジを呈するもののがいくつか出土している (Steadman et al. 2008: Fig. 14)<sup>7)</sup>。報告された図面を見る限り、これらは固定パターンをとるものであり、変動パターンをとるものはない。続くフェイズ Ia (前 3600～前 3300/3200 年頃)においても、前代と器形に大きな変化は認められず、固定パターンをとる土器が増える。一方で、外面が赤～オレンジ色、内面が黒色を呈する変動パターンの土器も出土するようになる (Steadman et al. 2008: 63-64, Fig. 15)。中でも底部に凹みのある特徴的な小型の鉢 (Ompharos Bowl) は内面に光沢が表れるほどにミガキが施されており、この時期を特徴づける遺物として数多く出土している。なお、この小型の鉢は特殊な建物から出土したと考えられており、儀礼や儀礼と密接に関わる行為との関連性が指摘されている (Steadman et al. 2018: 72)。こうした状況から H. C. アクギュル (Akgül) は、少なくとも前 3600 年頃には赤黒土器が出現していたと評価する (Akgül 2012)。

続く前期青銅器時代への移行期 (Transitional Period) として独立した位置付けがなされているフェイズ IIc2 (前 3200～前 3100/3000 年頃)<sup>8)</sup> および前期青銅器時代I期のフェイズ IIc1 においても、前代との器種や色調のパターンについての共通性が指摘されている (Steadman et al. 2008)。前期青銅器時代 II・III期に対応するとされるフェイズ IIb・IIa についての土器の報告はなされていないため、赤黒土器の様相

についてはわからない。

キュルテペ遺跡北トレンチにおいても第VI層以下 (前期青銅器時代I期) において、赤黒土器が確認されていることは先に示した。小型の鉢が多く、外面がバフ～オレンジ色、内面が黒色を呈する変動パターンをとる。内面には特にミガキが施され、一部には光沢を帯びる。現時点においては固定パターンをとるものは確認されていない。こうした特徴をもった土器は、キュルテペ遺跡が位置するカイセリ県内での一般調査でも採取されており、赤黒土器が中央アナトリア南部 (クズルウルマック川の南) にまで分布していたことを示すものである (須藤 2015; Sudo et al. 2017)。

このように、中央アナトリアの赤黒土器は前4千年紀半ばには出現し、前期青銅器時代I期まで存続することが確認される。そしてそれらの中には、変動パターンを示すものが存在することを確認した。これは、北東アナトリアやトランスコーカサスの赤黒土器とは、赤黒のパターンが異なることを示す。先にも触れたように、北東アナトリアのソス・ホユック遺跡ではVA期 (前 3500～3000 年頃) の最下層から赤黒土器が確認されているが、それらは固定パターンをとる (Palumbi 2008)。器形も中央アナトリアに特徴的なフルーツスタンドなどはなく、トランスコーカサスのものと共通している。

一方で、南東アナトリアに位置するアルスランテペ遺跡では、VII期末 (前 3500～前 3400 年頃) に赤黒土器が出現する。壺は外面が黒色で内面が赤色、鉢やフルーツスタンドでは色調が反転する変動パターンをとる。この時期の土器には定量的な分析が行われており、それを参照すると赤黒土器の割合は全体のわずか1～2%しかなく、スサ混和土器 (Chaff-Faced Ware) がそのほとんどを占める (Palumbi 2003)。続くVIA期 (前 3400～前 3000 年頃) になってもその割合は12%となっており、土器群の中で主体なすものではないようである。前期青銅器時代のVIB1期 (前 3000～前 2900 年頃) になると赤黒土器が増加するのだが、建築遺構や土器の特徴は、それ以前とは異なって北東アナトリアやトランスコーカサスの影響を受けたものとなる。ただし、この中でも小型の鉢に限っては、VII期以来の変動パターンが採用されているようだ。続くVIB2期 (前 2900～前 2800 年頃) ではユーフラテス中流域の前期青銅器時代I期に一般的な無文土器 (Plain Simple Ware) が主体となる。この時期に年代づけられる王墓 (Royal Tomb) からは赤黒土器も副葬されている。そのほとんどは固定パターンを示すが、やはり小型の鉢に限っては変動パターンが採用されている。その後、VIB3期 (前 2800～前 2750 年頃) では再びVIB1期のような北東アナトリアやトランスコーカサスの影響を受けた赤黒土

器が主体となる。そして前期青銅器時代Ⅱ期とされるVIC期になると、黒色土器と彩文土器で構成されるゲリンジックタイプ (Gelincik Type) が主体となり、赤黒土器はみられなくなる (Frangipane 2012)。

アルスランテペ遺跡で前4千年紀半ばに出現した赤黒土器の特徴からは、器種や赤黒のパターンから中央アナトリアとの類似性がうかがえる。しかし、その出土割合は極めて低く、この点において中央アナトリアとは異なっていることが指摘できる。前期青銅器時代になると、赤黒土器が主体となる時期があるものの、それらは北東アナトリア、トランスコーカサスとの関連の中で捉えられるものであり、中央アナトリアとの関係は以前と比べると弱まるものと考えられる。

### (3) 小結

中央アナトリアの赤黒土器は、閉塞器形では外面が黒色を呈するものの、開放器形では内面が黒色で外面が赤色を呈する変動パターンをとる。チャドゥル・ホユックのフェイズ Ib 以前の土器が赤黒土器に含まれると認定するかによっては、赤黒土器の出現年代が相当に遡ることになる点には注意が必要だが、少なくとも後期銅器時代の前3600年頃には存在するとされる。この点から、中央アナトリアの赤黒土器は他地域よりも100年程度古いことが示される。ただし、今後の年代値の蓄積によっては変化する可能性があり、慎重に判断せざるを得ない面もあるため、ここでは現時点における現象のみを確認するに留めたい。

器種や赤黒の色調パターンについては、前4千年紀後半には中央アナトリアと南東アナトリアで共通することが示された。前者では赤黒土器が多く出土するのに対して、後者ではそれが非常に少ない出土割合であることからすれば、南東アナトリアの赤黒土器は中央アナトリアの影響を受けていたと評価できるだろう。また、北東アナトリア、トランスコーカサスにおける赤黒土器出現への関与も想定されるが、それらは固定パターンとして定着したようだ。

前期青銅器時代Ⅰ期になると、中央アナトリアの赤黒土器に大きな変化はないものの、南東アナトリアではトランスコーカサスの影響を受けた赤黒土器が出土するようになり、中央アナトリアとの関係は弱まるようである。ただし、小型の鉢については、依然として変動パターンが採用されており、完全に中央アナトリアの影響がなくなった訳ではない点には注意しておくべきであろう<sup>9)</sup>。

そしてⅡ期になると、赤黒土器はほとんど消えてしまうようになる。中央アナトリアでは、赤色系の土器が増加するようになり、ロクロ製の土器も出土するようになる。こうした変化が何によって生じたのか、については未解明の部分が多いものの、シリアン・ポト

ルなどの存在から北シリア方面からの影響は想定されるべきであろう (Özgüç 1986; Kontani 1995)。

## 4. まとめに代えて

本論では、中央アナトリアにおいて不明確であった前期青銅器時代の土器と建物址とその年代について、キュルテペ遺跡北トレンチの調査成果から概観を試み、その変遷を確認した。これにより、キュルテペ遺跡が少なくとも前期青銅器時代初頭にまで遡ることが明らかとなった。そして、これまでの中央アナトリア地域における編年の基準であったアリシャル・ホユック遺跡各層の年代は不明瞭な部分が多かったが、その時間的位置付けを考える資料が得られたことを示した。

次に、第Ⅺ層以下 (前期青銅器時代Ⅰ期) から出土した赤黒土器に注目し、赤黒土器からみた地域間関係について予察した。赤黒土器は前4千年紀中頃には中央アナトリアにおいて出現しており、北東、南東アナトリアへその影響を与えた可能性が考えられた。特に南東アナトリアとの共通性が高く、地域間交流の強さがうかがえた。

この時期の南東アナトリアでは、アルスランテペ遺跡にみられるように発達した行政システムや階層的に組織された集団の存在が想定されている (Frangipane 2012 など)。こうした集団と交流していた中央アナトリアの集団はどのような社会組織であったのか。残念ながら、キュルテペ遺跡北トレンチは後期銅器時代層にまで未だ到達していないが、同時期の物質文化、特に遺構の状況や集落の構造を明らかにすることがこれからの大きな課題となる。これまで前期青銅器時代Ⅲ期の巨大建築物 (Monumental Building) (Kulakoğlu et al. 2013; Kulakoğlu 2015, 2017 など) が確認されているが、これが突如出現するのか、または前期青銅器時代Ⅱ~Ⅰ期または後期銅器時代にも存在するのか、についてもこれからの議論の焦点の一つとなるはずである。

前期青銅器時代Ⅰ期には、南東アナトリアとの関係が弱まることを、キュルテペ遺跡北トレンチやアルスランテペ遺跡の状況からつかむことができた。そして前期青銅器時代Ⅱ期になると、中央アナトリアでは土器群の組成に大きな変化が現れ、赤黒土器はその姿を消すことになる。その理由の一つとして北シリア方面からの影響が想定されるものの、具体的には明確にし得なかった。後期銅器時代以来の土器伝統がどのようにして変容したのか、この点も、非常に重要な論点であると考えられる。

このように赤黒土器は、中央アナトリアの後期銅器時代~前期青銅器時代Ⅰ期を評価する上で、重要な意味をもつものと考えられる。本論では非常に大雑把な分

析しか行っておらず、器種ごとの更なる分析が必要なことは論を待たない。また、西からの影響（三宅1992）やトランスコーカサスの影響（Steadman et al. 2018）が中央アナトリアにどの程度の影響を及ぼしたのか。これらは今後の課題とさせていただきたい。

#### 謝辞

本研究をなすにあたり、アンカラ大学のフィクリ・クラックオウル教授、ノートルダム清心女子大学の紺谷亮一教授からはキュルテペ遺跡の調査や資料について多くの便宜を図っていただいた。金沢大学の上山彰紀特任准教授、岡山市立オリエント美術館の須藤寛史氏、千葉工業大学の下釜和也氏、古代オリエント博物館の千本真生氏からはキュルテペ遺跡北トレンチ出土資料について折に触れて議論させていただき、また文献の入手についてもご協力いただいた。査読者の方にも非常に有益なコメントいただいた。ここに記して感謝申し上げます。

また本研究は、公益財団法人高梨学術奨励基金若手研究助成、公益財団法人三菱財団人文科学研究助成、およびJSP 科研費 JPS20K01097 の助成を受けたものです。

#### 【註】

1. キュルテペ遺跡北トレンチ出土遺物は最終報告書未刊のため、本論における層位や年代に関する記述は暫定的な所見が含まれることをお断りしておきたい。
2. Kulakoğlu et al. 2020 では第Ⅰ～第Ⅶ層までの計14点の年代測定しかできていなかった。本論では、その後にも行った年代測定結果を追加し、IntCal2020 (Bronk Ramsey 2009; Reimer et al. 2020) で校正し直した結果を提示する。
3. なお、これまでにアンカラ大学が行ってきた調査地点では、前期青銅器時代Ⅱ期の建物址や同Ⅲ期の巨大建築物 (Monumental Building) が確認されている (Kulakoğlu et al. 2013; Kulakoğlu 2015, 2017)。これらは基本的には石の壁体で建物が構築されているが、前期青銅器時代Ⅲ期の巨大建築物については、壁体の基礎の中に梁状の木材が入っていたことが一部で確認されている (Kulakoğlu 2017, Fig. 3)。
4. 最近では、*Paléorient* 誌40/2にコーカサス、イラン、アナトリア、レヴァントにおけるクラ・アラクス文化の様相についての特集が組まれている (Palumbi and Chataigner 2014)。
5. Alternate Pattern の訳語として、須藤 (2015) にならい変動パターンと訳す。
6. 年代については、報告年によって若干の差異がある。ここでは、Steadman et al. 2019 のものを用いる。
7. こうした傾向は中期銅石器時代でも同様のものである (Steadman et al. 2008)。
8. チャドウル・ホック遺跡では、後期銅石器時代と前期青銅器時代の間「移行期」を設けている (Steadman et al. 2007)。
9. 須藤はキュルテペ遺跡出土カナアン石刃の分析から、前4～3千年紀における両地域間の交流を指摘している (須藤 2018; Sudo 2021)。

#### 【参照文献】

Akgül, H. C. 2012 Looking to the West: The Late Chalcolithic Red-Black Ware of Upper Euphrates Region. *Orini* 34: 97-109.

Bittel, K. 1950 Zur Chronologie der Anatolischen Frühkulturen. In G. Behrens and J. Werner (eds.),

*Reinecke Festschrift: zum 75. Geburtstag von Paul Reinecke am 25. September 1947*, 13-25. Mainz, E. Schneider.

Braidwood, R. J. and L. S. Braidwood 1960 *Excavations in the Plain of Antioch I: The Earlier Assemblages Phases A-J*. Oriental Institute Publications LXI. Chicago, The University of Chicago Press.

Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian Analysis of Radiocarbon Dates. *Radiocarbon* 51(1): 337-360.

Burney, C. and D. M. Lang 1971. *The Peoples of Hills: Ancient Ararat and Caucasus*. London, Weidenfeld and Nicolson.

Dittmann, R. 2009 Randnotizen zu den frühen Beziehungen Anatoliens. *Altorientalische Forschungen* 36: 3-15.

Düring, B. 2011 *The Prehistory of Asia Minor: From Complex Hunter-Gatherers to Early Urban Societies*. Cambridge, Cambridge University Press.

Frangipane, M. 2012 The Collapse of the 4th Millennium Centralised System at Arslantepe and the Far-Reaching Changes in 3rd Millennium Societies. *Orini* 34: 237-260.

Frangipane, M. 2014 After Collapse: Continuity and Disruption in the Settlement by Kura-Araxes-Linked Pastoral Groups at Arslantepe-Malatya (Turkey). New data. *Paléorient* 40/2: 169-182.

Kontani, R. 1995 Relations between Kültepe and Northern Syria during the Third Millennium B.C. *Bulletin of the Ancient Orient Museum* 16: 109-142.

Kuftin, B. 1941 *Arkheologicheskie raskopki v Trialeti*. Tbilisi, Akademii Nauk Gruzinskoi SSR.

Kulakoğlu, F. 2015 Current Research at Kültepe. In F. Kulakoğlu and C. Michel (eds.), *Proceedings of the 1st Kültepe International Meeting, Kültepe, September 19-23 2013, 9-21*. Subartu XXXV. Turnhout, Brepols Publishers.

Kulakoğlu, F. 2017 Early Bronze Age Monumental Structure at Kültepe. In F. Kulakoğlu and G. Barjamovic (eds.), *Proceedings of the 2nd Kültepe International Meeting, Kültepe, 26-30 July 22 2015. Studies Dedicated to Klaas Veenhof*, 217-226. Subartu XXXIX. Turnhout, Brepols Publishers.

Kulakoğlu, F., K. Emre, R. Kontani, S. Ezer and G. Öztürk 2013 Kültepe-Kaniş, Turkey, Preliminary Report on the 2012 Excavations. *Bulletin of Okayama Orient Museum* 27: 43-50.

Kulakoğlu, F., R. Kontani, A. Uesugi, Y. Yamaguchi, K. Shimogama and M. Semmoto 2020 Preliminary Report of Excavations in the Northern Sector of Kültepe 2015-2017. In F. Kulakoğlu, C. Michel and G. Öztürk (eds.), *Integrative Approaches to the Archaeology and History of Kültepe-Kaneş, Kültepe, 4-7 August 2017*, 8-88. Subartu XLV. Turnhout, Brepols Publishers.

Orthmann, W. 1963 *Die Keramik der frühen Bronzezeit aus Inneranatolien*. Istanbul Forschungen 24. Berlin, Verlag Gebr. Mann.

Özgüç, T. 1986 New Observations on the Relationship of Kültepe with Southeast Anatolia and North Syria during the Third Millennium BC. In J. V. Candy, E. Porada, B. S. Ridgway and T. Stech (eds.), *Ancient*

- Anatolia: Aspects of Change and Cultural Development: Essays in Honor of Machteld J. Mellink*, 31-47. Madison, University of Wisconsin Press.
- Palumbi, G. 2003 Red Black Pottery: Eastern Anatolian and Transcaucasian Relationships around the Mid-Fourth Millennium BC. *Ancient Near Eastern Studies* 40: 80-134.
- Palumbi, G. 2008 Mid-Fourth Millennium Red-Black Burnished Wares from Anatolia: A Cross-comparison. In K. S. Rubinson and A. Sagona (eds.), *Ceramics in Transitions: Chalcolithic through Iron Age in the Highlands of the Southern Caucasus and Anatolia*, 39-58. *Ancient Near Eastern Studies Supplement* 27. Leuven-Paris-Dudley, Peeters.
- Palumbi, G. and C. Chataigner 2014 The Kura-Araxes Culture from the Caucasus to Iran, Anatolia and the Levant: Between Unity and Diversity. *A Synthesis. Paléorient* 40/2: 247-260.
- Reimer, P. J., W. E. N. Austin, E. Bard, A. Bayliss, P. G. Blackwell, C. Bronk Ramsey, M. Butzin, H. Cheng, R. L. Edwards, M. Friedrich, P. M. Grootes, T. P. Guilderson, I. Hajdas, T. J. Heaton, A. G. Hogg, K. A. Hughen, B. Kromer, S. W. Manning, R. Muscheler, J. G. Palmer, C. Pearson, J. van der Plicht, R. W. Reimer, D. A. Richards, E. M. Scott, J. R. Southon, C. S. M. Turney, L. Wacker, F. Adolphi, U. Büntgen, M. Capano, S. M. Fahrni, A. Fogtmann-Schulz, R. Friedrich, P. Köhler, S. Kudsk, F. Miyake, J. Olsen, F. Reinig, M. Sakamoto, A. Sookdeo and S. Talamo 2020 The IntCal20 Northern Hemisphere Radiocarbon Age Calibration Curve (0-55 cal kBP). *Radiocarbon* 62(4): 725-757.
- Schoop, U. D. 2005 *Das anatolische Chalkolithikum: Eine chronologische Untersuchung zur vorbronzezeitlichen Kultursequenz im nördlichen Zentralanatolien und den angrenzenden Gebieten*. Urgeschichtliche Studien 1. Remshalden, Verlag Bernhard Albert Greiner.
- Schoop, U. D. 2011 The Chalcolithic on the Plateau. In S. R. Steadman and G. MacMahon (eds.), *The Oxford Handbook of Ancient Anatolia: 10000-323 B.C.E.*, 150-173. Oxford, Oxford University Press.
- Steadman, S. R. 2011 The Early Bronze Age on the Plateau. In S. R. Steadman and G. MacMahon (eds.), *The Oxford Handbook of Ancient Anatolia: 10000-323 B.C.E.*, 229-259. Oxford, Oxford University Press.
- Steadman, S. R., B. S. Arbuckle and G. McMahon 2018 Pivoting East: Çadır Höyük, Transcaucasia, and Complex Connectivity in the Late Chalcolithic. *Documenta Praehistorica* XLV: 64-84.
- Steadman, S. R., G. McMahon, B. S. Arbuckle, M. von Baeyer, A. Smith, B. Yıldırım, L. D. Hackley, S. Selover and S. Spagni 2019 Stability and Change at Çadır Höyük in Central Anatolia: A Case of Late Chalcolithic Globalisation? *Anatolian Studies* 69: 21-57.
- Steadman, S. R., G. McMahon and J. C. Ross 2007 The Late Chalcolithic at Çadır Höyük in Central Anatolia. *Journal of Field Archaeology* 32-4: 385-406.
- Steadman, S. R., J. C. Ross, G. McMahon and R. L. Gorny 2008 Excavations on the North-Central Plateau: The Chalcolithic and Early Bronze Age Occupation at Çadır Höyük. *Anatolian Studies* 58: 47-86.
- Sudo, H. 2021 Canaanite Blades from Kültepe, Central Anatolia. In F. Kulakoğlu, G. Kryszat and C. Michel (eds.), *Cultural Exchange and Current Research in Kültepe and its Surroundings, Kültepe, 1-4 August 2019*, 51-63. Subartu XLVI. Turnhout, Brepols Publishers.
- Sudo, H., Y. Yamaguchi and R. Kontani 2017 An Archaeological Assessment of the Kayseri Province during the Chalcolithic Period: New Evidence from the Archaeological Survey Project in Kayseri, Turkey (KAYAP). In F. Kulakoğlu and G. Barjamovic (eds.), *Proceedings of the 2nd Kültepe International Meeting, Kültepe, 26-30 July 22 2015. Studies Dedicated to Klaas Veenhof*, 227-242. Subartu XXXIX. Turnhout, Brepols Publishers.
- Thissen, L. 1993 New Insights in Balkan-Anatolian Connections in the Late Chalcolithic: Old Evidence from Turkish Black Sea Littoral. *Anatolian Studies* 43: 207-237.
- Yakar, J. 2002 Revising Early Bronze Age Chronology of Anatolia. In R. Aslan, S. Blum, G. Kastl, F. Schweizer and D. Thumm (eds.), *Mauerschau: Festschrift für Manfred Korfmann*, 445-456. Volume I. Remshalden-Brunbach, Bernhard Albert Greiner.
- von der Osten, H. H. 1937 *The Alişar Hüyük: Seasons of 1930-1932, Part I*. Oriental Institute Publications XX VIII. Chicago, The University of Chicago Press.
- 上杉彰紀・紺谷亮一・須藤寛史・山口雄治・F.クラックオウル 2016 「銅器時代～前期青銅器時代・アナトリア中央部における土器の様相」『西アジア考古学会第21回総会・大会要旨集』西アジア考古学会 3-4頁。
- 紺谷亮一・上杉彰紀・F.クラックオウル・早川裕式 2016 「中央アナトリアにおける都市の起源を探る—キュルテベ遺跡北トレンチ発掘調査2015—」『第23回西アジア発掘調査報告会報告集』日本西アジア考古学会 57-62頁。
- 紺谷亮一・山口雄治・下釜和也・F.クラックオウル 2020 「中央アナトリアにおける銅器時代解明にむけて」『第27回西アジア発掘調査報告会報告集』日本西アジア考古学会 49-51頁。
- 下釜和也・山口雄治・紺谷亮一・上杉彰紀・山口莉歩 2017 「中央アナトリア前期青銅器時代における「非在地系土器」—キュルテベ遺跡出土土器の評価をめぐって—」『西アジア考古学会第22回総会・大会要旨集』西アジア考古学会 73-76頁。
- 須藤寛史 2015 「トルコ共和国カイセリ県の赤黒土器」『岡山市立オリエント美術館研究紀要』29巻 14-29頁。
- 須藤寛史 2018 「中央アナトリア、キュルテベ遺跡のカナアン石刃」『岡山市立オリエント美術館研究紀要』31巻 33-44頁。
- 三宅 裕 1992 「中央アナトリアにおける銅器時代～一般調査を通してみた編年上の諸問題」『カマンカレホユック』1号 195-223頁 中近東文化センター。
- 山口雄治・紺谷亮一・上杉彰紀・下釜和也・千本真生・F.クラックオウル 2020 「中央アナトリアにおける前期青銅器時代土器の変遷とその年代—キュルテベ遺跡出土資料を中心に—」『オリエント』62巻2号 179-180頁。